

2021 年度 環境政策論Ⅱ レポートについて

【提出期間】12月21日（火）～1月3日（月）23時

【字数制限】1問につき1,500字以内

【問題数】4問必須解答

※選択式ではありませんので、4問すべてに解答して下さい。

いずれかの問題に解答しない場合は、該当の問題の得点が0点になりますので、
ご注意下さい。

○ 試験場での試験ではなく、レポートで、相当の時間を与えられているのですから、何を参考資料にしてもかまいませんが、自分で考えたことが分かる論述を展開し、＜これで合格するだろう＞程度のレベルではなく、自分で書けるベストの論述を提出して下さい。いわゆる＜copy and paste＞は厳禁です。引用には出典を明記して下さい。 必要なら、多少の表、グラフ等を挿入してもかまいません。そのさい、これらと参考文献・出典は字数には含まれません。

学期末レポート問題（OECC より）

イギリス・グラスゴーにて、2021 年 10 月 31 日～11 月 13 日にかけて開催された国連気候変動枠組条約第 26 回締約国会議（COP26）では、「グラスゴー気候合意」が採択され、2100 年の世界平均気温の上昇を、産業革命前に比べて 1.5 度以内に抑える努力を追求することが盛り込まれた。

パリ協定（2015 年採択、翌 2016 年発効）で合意された目標と今回のグラスゴー気候合意の目標の違い、また、グラスゴー気候合意の特徴や課題について、下記の 3 つのキーワードを用いて論じると共に、日本政府が掲げる 2050 年カーボンニュートラル、2030 年度に 46%削減（2013 年比）といった目標達成には、どのような取組が効果的か、自身の考えを述べなさい。

キーワード：「1.5 度目標」、「石炭火力発電」、「各国の排出削減目標（NDC）」

文字数目安：グラスゴー気候合意の特徴や課題：500 字以上、1,000 字以内
日本政府の目標達成に向けた取組：500 字以内

SDGs への取り組みが進む中、持続可能な社会づくりを担う人づくりはますます重要になっています。特に、学校教育を終えた世代において、どのような学びの場と、どのような担い手が求められるか、環境教育促進法（H24 年改正）とそれに至る歴史を踏まえ、重視するポイントと展開方法について論じなさい。（字数制限 1500 字程度）

環境政策論Ⅱ レポート課題（日比講師）

以下のキーワードを全て使った上で、生物多様性と社会/経済/生活との関わりについて、具体的な事例や個人的経験を交えて記述せよ。

生態系サービス、気候変動、将来世代、原材料、NGO

●2021（令和3）年度 環境政策論Ⅱ レポート課題 講師名：川村研治

環境 NGO に期待される役割を 3 つ、あなたが重要だと考える順に列挙し、その順番にした理由をできる限り具体的に書いてください。

「環境 NGO の役割」は、環境政策論Ⅱの講義資料（12月16日、12月23日分）に基づいて書いてください。講義資料から逸脱した回答は採点の対象外といたしますので、ご注意ください。

レポート課題①(OECC:家本講師・渡会講師・渡邊講師)講評

前半:グラスゴー気候合意の特徴や課題

- ・ほとんどの方が3つのキーワード(1.5度目標、石炭火力発電、各国の排出削減目標(NDC))を用いてレポートを作成していた。
- ・1.5度目標:パリ協定(2度目標・1.5度の抑制努力)からの目標強化。
- ・石炭火力発電:当初は「段階的廃止」が提案されていたが、一部の国の反対に遭い、「段階的削減」の表記となった。また個別の発電手法の規制が国際文書に明記されたのは初めて。
- ・各国の排出削減目標(NDC):グラスゴー合意で決定された1.5度目標に応じた各国の目標引き上げが求められ、2022年末までに提出。

→キーワード3番目の各国の排出削減目標の理由の説明がなされていない答案が目立った。

- ・また、3つのキーワードに加えて、パリ協定6条(市場メカニズム)のルール採択により、パリ協定の完全運用が決定されたことや、先進国から途上国への資金提供(年間1,000億ドル)が未達成であり、資金面での取組が引き続き求められること、等、グラスゴー気候合意の内容を取り上げた答案には加点した。

後半:日本の目標達成に向けた自身の考え

- ・「自身の考え」を記述する課題であったので、日本の気候変動対策や取組に関する記述であれば、再生可能エネルギー、環境教育、電気・水素自動車、森林保全・植林、技術革新、リサイクル・プラスチックごみ対策、食品ロス削減、ESG投資、炭素税、二国間クレジット制度(JCM)、CO2回収・貯留(CCS)、NGO支援、他、どのような取組であっても可。単に「目標達成のため〇〇すべき。」の表記のみならず、論理的に、なぜその対策・取組を行うべきか、(他の手法に比べて)効果的か、といった論理的な記述には加点した。

一方で、自身の考えが記載されず、日本政府の取組のみを記述したものは減点とした。

＜以下、加点のポイント(例)＞

- ・火力発電から再生可能エネルギー・自然エネルギーへの転換:再エネ(太陽光発電、風力発電等)の発電量の不安定性や発電総量に関する言及があれば加点。
- ・原子力発電の活用:放射性廃棄物処理に関する記述があれば加点(原発の安全性への記述は見られたが、廃棄物処理に言及した答案は無かった)。
- ・水素燃料、アンモニア燃料の活用:水素やアンモニア製造にかかるコストや課題に対する言及があれば加点。

また、誤字や脱字が目立つレポートは減点対象とした。また、意味が通らない不完全な文章となっているものも減点とした。レポート提出時に改めて自身が作成した文章を読み返す等して、チェックして頂きたい

レポート講評②（森講師）

今回のレポートは、環境教育と ESD の歴史的背景を踏まえ、学校卒業後の学習の場と担い手について論述することをテーマにした。

授業で用意した資料で提示した、歴史的な経緯やポイントについては多くの学生が取り上げており、一定の理解を得ていることがわかる。また学習の場や担い手についても、そこで提示した事例をあげるレポートが多かった。

しかしながら、自身にとっての場や機会をめぐる論述はわずかで、より多角的な視野に立った提案や論述がなかったのが残念だった。

SDGs と絡め、持続可能な社会づくりを担う人材養成は今後ますます重要になることは、多くのレポートで書かれ認識されていると受け止めたが、その具体的な展開についてのアイデアや考察を求めたかったところである。

レポートの多くが、授業で提示した情報を編集しなおす傾向が見受けられることから、今後は得た情報からいかに自身で考え、自身の問題意識と合わせて提案をつくれるかに主眼をおきたい。

レポート講評③（生物多様性：日比講師）

「生物多様性」をテーマとした試験問題は、自然資本と持続可能な開発、生物多様性の実践：パートナーシップによる革新的な取り組みの2講義を対象としたものでした。

指定した5つのキーワードを全て使って、生物多様性と経済や生活との関連性を、具体的に展開してもらいましたが、全体的によく書けていたと思います。特に、自身の個人的な体験、たとえばご実家や祖父母の田舎での自然とのふれあい、あるいは日常の食生活などを生態系サービスを介して考察したものなど、本質を捉えた良い内容もありました。生物多様性問題の最も重要なポイントのひとつが、全ての人にとって繋がりがあ、影響や依存があるということですから、個人の経験とつなげるというのは極めて重要です。

他いくつか気づいた点としては：

- ・「気候変動」についてはほとんどの人が生物多様性への脅威という論点で触れていました。これはもちろん間違いではありませんが、生物多様性（自然）が持つ気候変動対策（緩和、適応の両方）としてのポテンシャルについて言及した人はほとんどなかったように思い、個人的にはちょっと残念でした

- ・「具体的な事例」は、講義・資料で取り上げたコーヒーやファッションについて書いたケースが多かったですね。もちろん間違いではありませんが、であればそれこそ個人の経験や視点を論旨に展開してもらえれば、加点対象になったかと思います

- ・生態系サービスの説明などは、講義資料からそのままコピペのケースがかなり多く見られました。これも間違いではありませんが、引用する場合は、時間制限のない試験答案でもありますし、かならず参考文献（もちろん講義資料だけでなく他の文献を参照した場合）を明記するという癖をつけてもらえればと思います（でないと、盗用ということになってしまいます。文献リストを末尾つけている人も複数いました）。そして、その上で、自身の考え、論旨を展開することが重要です

- ・多くはありませんでしたが、5つのキーワードのうち、4つだけ（中には2つだけ）使って回答している人がいました。書かれている内容自体は間違っていない場合もありましたが、キーワードは生物多様性問題を考え、構造的に理解する上で触れるべきポイントを選び出して決めますので、5つすべて使っていない答案は減点対象としています（もったいないですね）

- ・残念ながら、昨年以前の試験問題の回答をコピペしただけの答案がありました。こういうこととしてまで回答するリスクというものをよく考えてほしいと思います。まず学びの機会になりません。またもし採点者が気づかず採点した場合このような不正行為であっても世の中やっていけるという「成功体験」となってしまい、必ず将来社会に出た際に影響してきます。まじめに取り組んだ他の学生に対してもアンフェアかつディスリスペクトな行為

環境政策論 II 講評

講師名：川村研治

演 題：12月16日 環境 NGO の果たす役割

12月23日 環境パートナーシップの形成を目指して

「講義資料と補足資料を良く読んでください」の一言に尽きるのですが、少し説明します。

今回のオンライン授業は、web クラスにアップした講義資料を読み、講師が課したテーマに対してレポートを書いていただきました。実際には、23日の講義資料（特に補足資料）がほとんど読まれていないとわかったのは驚きましたが、レポートのテーマが「環境 NGO に期待される役割」ですから、12月16日の資料だけを読めば十分と思ったのかもしれませんが。誤解を生む可能性のあるテーマだったことを反省し、今回は23日の講義資料を参照していないレポートであっても採点の対象としました。レポートの課題には「講義資料に基づかないレポートは採点の対象外」と明記しているのですから、本来であればほとんどが採点対象外だったことになります。今回のレポートの鍵となるマルチステークホルダー・パートナーシップやSDGsは23日の講義資料に書いてあります。この資料を読んでいただけなかったことが残念でした。次年度以降の私への宿題です。

16日の講義資料すら全く参照せずに、的確な論理を展開したレポートもありました。おそらく、私の講義を受講する必要のないくらい NGO や環境パートナーシップに通じている学生さんなのでしょう。無駄な時間を使わせてしまったお詫びにこれも採点の対象としました。

高い評価を付けたレポートは、SDGs やパリ協定と言った昨今の流れを踏まえた上で論じられています。特に、自身の体験と結びつけマルチステークホルダー・パートナーシップの重要性を指摘してくれたレポートは読んでいてうれしくなりました。SDGs の時代には、地球規模問題を自分ごととして考え、行動し、他者と協働する姿勢がとても大切です。自身の体験や活動に引きつけて論を進めてくださった学生諸君のレポートは読み応えがあります。真摯にレポートに取り組んでくださったみなさんに、お礼を述べて終わりにします。ありがとうございました。どこかで、この講義が役に立ちますよう。

できましたら時間のあるときに12月23日の資料も読んでみてください。

ですね。そして、採点者（この場合、教員が本職ではないゲスト講師である私）の貴重な時間を無駄に使わせることになります。当たり前のことですが、こういうことは他の講義においてもしないようにしてください。